
反抗者

ひとり雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

反抗者

【Nコード】

N8522F

【作者名】

ひとり雨

【あらすじ】

運命に従うだけではつまらない。定められたものから抗おうとするのならば、覚悟を。そして対価を。そうすれば私達は与えよう、抗う術を。その術を、行使しよう。世に反した、反抗者として。

荒廃した街の一角に聳え立つ、巨大な廃ビル。所々崩れかけていて、非常に危険なその場所の屋上で、揺れ動く二つの影があった。

「この世は退屈ね、ジル。何にも退屈しのぎが無いじゃない？」

影の一つである赤い長髪でツインテールの少女らしき人物はもう一人に語りかける。ジルと呼ばれた同じ赤いショートヘアの少女は陰って行く空を見つめて言った。

「リル。迷い子が来ているのが分からない？ 憎悪と欺瞞に溢れた世界に溺れ、そこから這い上がる術を求める迷い子が……」

「……ああ、ホントだ。まだいたのね。悪魔に魂を売ってしまった者を助けようとする者が……」

そう言つと、ジルとリルは、美しい赤い髪を揺らし、紫色の眼を細め微笑し、自分達が居た廃ビルの屋上から、飛び降りた。

薄汚れた作業服を着た少年は、その背に小さな少女を負っっていた。少年の背中に顔をうずめる少女は、息切れ、顔は赤らみ、苦しんでいた。少女の苦痛を察してか、少年は小さく首を後ろに回し、少女を気遣う。少年の黒髪が、少女の顔にかかる。

「大丈夫か、エミリア？ もう少しで着くからな……」

しかし、その問いかけにも少女は答えることが出来ないらしく、その場には沈黙が流れるのみだった。周りには人の影すらなく、孤独感が余計に少年の心を戸惑わせ、焦らせる。

立ち止まっているわけにもいかず、少年が歩き続けると、やがて見上げるほどの大きい廃ビルが目の前に見えた。少年がそこへ意を決したように入っていくとした瞬間、上空から衝撃を伴って何かが落ちてきた。

突然の事で身動きが取れず、少年がただ驚いていると、やがて少年

の傍に何か近付いてきた。

「……！？」

落ちてきたものは、人間だった。普通ならば間違いなく死んでいくはずだが、少年に近付いてきた人間は、傷一つ負っていない双子の少女だった。赤い髪と紫色の目は妖しさを引き立たせている。

「……貴方、生き餌でしょう？ その女の子の。私達に、依頼をしにきたのでしょうか？」

ジルは冷たく少年達を見下しながら言った。まるで汚いものを見つめるように。少年はしばらく下を俯いていたが、やがて顔を上げて言った。

「……お前達は、反抗者か。……俺はエクス。頼む、妹を……エミリアを、助けてくれ……！」

「反抗者、ねえ……立派な名前付けてくれるじゃない？ 私達だつてちよつと身体は丈夫だけど、人間よ。貴方達との違いは、悪魔との契約を受けてしまったものと、そうでないものというだけなの？」

リルが可笑しそうに少年に微笑みかけて言う。リルはジルとは違い、何故か剣を持っていた。しかし彼女の表情もジルと同じく、軽蔑が込められている。少年は言い返せないようで、黙り込んだ。リルはそれがまた可笑しいようでまた何か言おうとする。が、ジルがそれを遮って少年に言った。

「止めなさい、リル。……いいわ。エクスとやら。エミリアの為に、命を懸ける覚悟があるのなら……悪魔からその子を引き剥がしてあげるわ。私達は反抗者^{リベリオン}。抗う力を、与える者。悪魔に干渉する事も出来る」

「さ、こつちよー」

ジルが言った後に、リルが二人を廃ビルの中に案内した。

中は薄暗く、何処に何があるのかがぼんやりと分かるくらいだった。しかし、奥に行くのとたった一つだけライトが灯り、手術台のよ
うな台が照らされているのが見えた。周りは寂れていて、コンクリ
ートの壁が圧迫感を強める。エクスは、ジルとリルに促されるがま
ま、エミリアを台の上に乗せた。

エミリアの顔がライトに照らされる。その顔を見たとき、エクス
は目を背けたくなった。

彼女の顔は蛆虫の（うじむし）ように這い回るとす黒い紋様で埋
め尽くされていた。右の目から鼻、頬にかけてそれが広がっており、
まるで食い潰されているかのように彼女の顔は酷い有様だった。

「これは……やはり『偽命^{フェイク}』ね」

ジルはエミリアの顔を見ても、冷静そのものだった。エクスは、
吐きそうになるのを必死に抑えながらジル達に聞いた。

「お前達は……これが何なのか、知っているのか……！？」

「……言ったでしょう？ 私達は反抗者^{リベリオン}。抗う者に、手を差し伸べ
る者。何だっけるのよ。この子……貴方達が犯したような『愚か
な罪』以外はね」

ジルがそう言うと、後ろに居たリルがエクスの腕をいきなり掴ん
だ。エクスは咄嗟の事に驚いてすぐにそれを振り払うが、リルは納
得したようにジルに言った。

「ジル、やっぱりよ。この子、生き餌になってる。馬鹿ね、喰われ
るつもりだったの？」

「どういう、ことだ……」

「あら貴方、その傷に気がついてないの？」

「……」

エクスがリルに掴まれた左腕を見ると、確かにエクスの左腕には、
自分では身に覚えの無い鎖状の傷が刻まれている事に気がついた。
痛みも、何も無い。だが、その恐怖にエクスは耐え切れなかった。

「う、うわあああッ……」

押し殺していた感情を爆発させ、叫び、狂い、恐怖に慄き、エクス

スはその場に座り込み、立つ事が出来なくなった。

初めて知ったのだ。自分の呪われた運命を。憎悪、と呼べる心の底の感情を。

乱れた呼吸で下を俯き、溢れ出して来るものを止められずに小さく呻き始めたエクスに向かってジルは慰めなどせず、冷たい視線を変えずに言った。

「……『偽命^{フェイク}』は悪魔の玩具。そして悪魔の化身。どんなに命が惜しくても、手を出してはいけないものなの。その紋様は身体を売った証拠。やがて自身が悪魔になり、最も親しい者を生き餌とし、血肉を喰らう」

何の反応も示さないエクスに、今度はリルが持っていた剣とは違う、小型のナイフを彼に向かって投げ、言った。

「……運命に抗うのなら、その覚悟を見せなさい。私達には、覚悟無き者は要らない。覚悟のある者に、世に反し抗う術を与える者だから」

ジルの言う事も、リルの言う事も、エクスには分かっていた。

全ては、自分達の心の弱さから生み出された結果。エミリアは、病弱だった。流行り病にかかり、生死の境を彷徨った。両親は必死の思いでエミリアを救おうとしたのだ。その時、道を間違えてしまったのだ。手を取ってはいけない方の手を取ってしまった。

両親はあの悪魔に殺された。それでもエミリアは甘言につられて悪魔を信じてしまった。その道筋の終わりがこの有様だったのだ。

その結果、苦しんでもそれは自業自得なのだ。

そして、何かを変える為には、それ相応の対価が必要だということなのだ。

エクスは、強く自分の左腕を握り、そして、落ちていたナイフを震える右手で拾った。そして――

「ああああっ!!!」

そのナイフを、一気に左腕に突き刺した。右手の感覚を無くすほどの鋭く激しい痛みが全身をはしる。

血と痛みと恐れ。その全てが、左腕から溢れ出るような気さえする。
「ぐっ……がああああ!!」

苦痛と嘆きが複雑に入り混じりながらも、エクスはナイフを再度握りしめ、もう二、三度左腕を刺し続けた。ジルとリルは何も言わず、ただそれを見つめていた。

渦巻く感情に押し潰され、壁に赤い血飛沫があがり、黒く見える血が床に溢れかえった時、エクスは今まで耐えていたが、急に目の前が真っ暗になり、その場に倒れこんだ。

「あーあ。倒れちゃったわよ、この子。死なないわよね?」

リルはそう言うときエクスの近く、血がつかない程度に近付いて座り込み、先程から腰に差していた剣でエクスの左腕を一息に切断した。躊躇いなど無く、一瞬で。エクスは苦痛で顔を歪ませるが、どうにも出来ないという感じでリルは黙り込んでいた。ジルは、苦しそうに呼吸をしているエミリアの方を見つめている。

「……彼の覚悟は受け取ったわ。そして、エミリアを救う対価も。

やるわよ、リル」

「……はあーい」

リルはそう言うとき、ジルの隣へと行った。エミリアの顔を埋め尽くす黒い文様を見下し、ジルとリルは言った。

「私達は、抗う者。対価を以って、お前に干渉する者」

「お前が奪われる事を拒むならば出てきなさい、悪魔……『偽命』^{フェイク}」

彼女達の声に反応して、黒い紋様がエミリアの顔から剥がれ、一つの形を成していく。それは、宝石のように黒く尖った、石になった。

ジルは、エクスからの対価を悪魔に渡した。それは、倒れたエクスからリルが回収した、エクスの左腕だった。

すると黒く尖った石、悪魔は不満そうに牙の生えた口へと変貌した。エクスの腕生々しく噛潰し、喰らい尽くした後も、まるで、そ

れでは物足りない、全部寄越せ、とでも言うように、ジルとリルに牙を向けた。

しかし、そんな様子に臆する気配すらも見せず、ジルとリルは、同時に口元を緩め、微笑した。

「流石悪魔、強欲ね……けれど、お前は消える。血肉を喰らった獣として、再び這い上がれる事の無い闇へ堕ちる」

「後悔しなさい、自身の罪を。そしてその血肉の味を噛み締めたま、消えろ」

ジルとリルが両手を悪魔に翳すと、悪魔は猛るような獣の姿になり、暴れてもがいた後、やがて砂のようになって崩れ落ちた。その砂は、外から吹いてきた風によって吹き飛ばされ、塵となって見えなくなった。

エクスが目を覚ますと、いつの間にか廃ビルの中で一夜を過ごしていたらしく、外から朝日が漏れているのが分かった。

「！」

エクスはすぐさまエミリアの下に駆け寄った。エミリアの顔にはもう、黒い紋様は影も形も無かった。だが、『偽命』^{フェイク}が蝕んでいた彼女の右眼部分には傷跡が残っていた。それでも彼女は安らかな表情で眠っている。失ったものはあるけれど、エミリアがそこにいることを確認してほっとした瞬間、自身の喪失感に気が付いた。

エクスの左腕は、無くなっていた。傷跡と思われる肩の部分には包帯が巻かれていて、不思議とあの時ほどの痛みは感じなかった。

後悔など、無かった。これは対価だと分かっていたから。自分の覚悟だと思い知らされたから。

周りを見ると、もうジルとリルはどこにも居なかった。もう用は無い、とでも言うように。しかし、エミリアの傍に、血が付いたナイフと折りたたまれた紙があった。

「罪を受け止め、歩みなさい。貴方には、まだ眼も耳も脚も、右腕

だつて残っている。抗うとは、歩み続ける事」

紙には、そう書かれていた。エクスがその紙を握りしめると、エミリアがうつすらと、目を開けた。

「……お兄ちゃん……？」

エクスは目に涙を浮かべ、起き上がったエミリアを力強く抱きしめた。

荒んだ街を先程とは別の廃ビルから眺めながら、リルは再び退屈そうに言った。

「もー……また退屈になっちゃった。また誰か来ないかな」

「リル。そう不謹慎な事を言つては駄目よ。でも……人は地に墮とされても這い上がる。私達はその抗いに手を貸す者だから」

そう言つてジルが笑う。リルも、その言葉にまた笑みを深めた。

「私達は、反抗者。^{リベリオン}それは、抗う者。抗う術を、与える者。運命を変えたいと望むのなら、覚悟と対価を以つて、願いなさい。そうすれば……私達はそこに現れる」

二人は揃つてそう言い、再び廃ビルの屋上から、消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8522f/>

反抗者

2010年10月8日15時56分発行